

明 柔

2008

優勝特集号
第10回 体重別優勝大会

明治大学柔道部明柔会会報



MEIJI UNV. JUDO CLUB
PERIODICALS

グローバル化の中で生きるということ

柔道部長 飯田和人

現代はグローバリゼーションの時代である。そうした中で、国際分業関係にも大きな変化が見られる。B R I C sに代表される新興工業国群が「世界の工場」として台頭する一方、先進資本主義諸国ではいわゆるポスト工業社会への移行が加速化している。



周知のように、わが国は、一九九〇年代初頭のバブル経済崩壊以降、失われた十年とも十五年ともいわれた長期の経済停滞を余儀なくされた。グローバル化に乗り遅れたことも、原因の一つである。ただし、二〇〇二年一月から始まつた景気回復は、日本経済がグローバル化した世界の中で独自の地位を確立したことで可能になつたものである。とりわけ、いまや世界の成長センターに躍進した東アジアの分業・生産ネットワークの中核としてのポジションを築きあげたことが大きい。

そこで、いま問題の世界的金融危機（さらに世界同時不況）さえ乗り切れるなら、グローバリゼーション下の国際分業関係の中に独自の地位を確保した日本経済は安泰かといえば、そうもないかない。新しい国際分業関係は、グローバル化の進展の中でさらに変化を遂げていく。現在日本が保持する競争優位のポジションは、新興諸国によつて瞬く間にキヤツチアップされることは目に見えている。そうした激しいグローバル競争下で、わが国が生き残つて行くには、不斷のイノベーションを通して新しい産業、新しい市場を開拓し続けていくしか途はないのである。それはまた日本の特性（ある意味でのローカル性）を生かし切ることで可能になる。

ところで、柔道の世界にもまたグローバル化の波が押し寄せていて。北京オリンピック男子柔道の結果は、このことを抜きには語れないだろう。その中で日本柔道が勝ち残るには、やはり不斷のイノベーションと日本人の特性を生かし切ることが求められている。今年、久しぶりの大学日本一を勝ち取つたわが明治大学柔道部が、そうした日本柔道の摇籃となることを切に期待したい。

—全日本学生体重別団体優勝大会の優勝に思う—

明柔会会長 関 勝治



明柔会会員諸兄におかれましては、日頃から明柔会への協力、明大柔道部への支援を頂いていること、厚く御礼申し上げる次第です。さて、去る十一月二日に尼崎市記念公園体育館で開催された体重別団体優勝大会において明大柔道部は八年振り二回目の優勝を成し遂げた。第十回記念大会となつた節目の年に優勝出来たことは、学生諸君の奮闘はもとより、柔道部、大学当局、明柔会の三位一体となつた活動の賜物である。

本学の体育会活動への学校側のバックアップ体制については、長きに亘りその改善と充実をお願いしてきたところ、近年、入試制度が改善され、本年度には十一名の有望な新入生が入部するところとなつた。道場での稽古は、学年の隔てなくライバル意識が芽生え、切磋琢磨する環境が整つたことにより、先の大会では、一年生の海老沼君、上川君が優秀選手に選出されるまでに成長し、将来に向けても明るい展望を抱けるまでに至つてゐる。

また、新たに制度化された学校側からの強化助成金によつて、本年度は夏期強化合宿を一度に亘り実施出来たことが大きな成果に繋がつたものであり、こうした学校側の体育会への対応改善に感謝するとともに、母校の名譽のために戦う学生の修練の場である体育会活動への一層の理解を賜りたいと願う。

柔道部においては、飯田部長の指揮の下、藤原監督、園田、猿渡両助監督が一丸となつて強化に取組み、それぞれ勤務先の業務がある中、合理的な分担によるトロイカ指導体制が功を奏したものと言えよう。監督がスカウトや涉外活動で道場を空けざるを得ない状況を園田助監督が厳しい指導で学生を鍛え上げることでフォローし、合宿所では猿渡助監督が学生と寝食を共にしながら生活指導に取組み、中濱君をはじめとするコーチ陣も良くサポートしてくれた結果、技量の向上に止まらず、学生の規律は著しく改善され、これが強固なチームワークに繋がつたものと思う。

こうした柔道部の活動を支える明柔会においては、四十年振りに会則を改正するなどして、より組織的に様々な課題に取組んでいる。特に奨学金制度については、経済情勢が厳しさを増している状況にあつて多くの篤志会員に負担をお願いしているが、柔道部員の育成支援として欠かせないものであることを理解頂き、安定的な運営に協力を頂戴したい。また、全国的な盛り上がりによる組織の活性化を目的に、諮問委員会において明柔会支部細則のあり方が検討されており、答申を受けた後に成案化し、来年度総会に諮ることとなつてゐる。

いずれにせよ、今回の体重別団体大会の優勝は学校、柔道部、明柔会が連携、結束して柔道部強化に取組んだ成果であるが、明大柔道部の伝統に終わりはない。無差別優勝大会での優勝と併せた完全優勝を目指して、学生諸君には一層の奮起を期待する。

結びにあたつて、団体戦に勝つためのキーワードを記す。

- 率先垂範（上級生自ら稽古と雑用に取組む）
- 自己鍛錬（自らを極限まで追い詰める稽古）
- 相手探求（己を知ると共に相手の研究が重要）
- 先手必勝（積極的な攻撃柔道と先鋒の戦い振りがポイント）
- 失点回避（勝たずとも負けないことで貢献する戦い方もある）

全日本学生柔道体重別団体優勝大会

優勝までの回顧

監督 藤原敬生



八年ぶり二回目の日本一。全選手が、精一杯力を出し切ってくれました。

本当に良く、頑張ったと思います。



本年の念頭の挨拶にも述べさせて頂きましが「最大の敵、己に勝つ」、六月の優勝大会で決勝で涙をのんだ後、夏の強化練習（二度の地方合宿：旭化成、新日鐵）において選手それぞれが課題の洗い出し、弱点の克服などを徹底的に行い、鍛えてきた。旭化成の延岡合宿では35℃を越す体育馆の中で、寝技立ち技の乱取りを相当数こなし。脱水症状を起こし掛けた選手も散見されたが、練習を休むことなく、やり通した。

新日鐵の姫路合宿では、ランニングトレーニングをポイントに取り入れ、スタミナ作りにも重点をおいた。一年生の重量級（上川、原田）も巨漢を最後まで力をふりしぼり走り切り切っていたのが、印象的だった。

九月初旬に行われた、東京体重別選手権で三人の優勝者（山本、影野、赤迫）を出し、全日本体重別（10中旬）の出場者は19名を数えた。しかし、一階級も制する事が出来なかつた。一瞬、夏に鍛えたことが切れたのかなとも思つた。私以上に、選手は悔しかつたに違ひないと感じた。この悔し

さをエネルギーに換えて団体戦で完全燃焼してくればと必ず結果はついてくると、前向きに考えた。

その二週間後に開催された尼崎の地で、選手達は体重別個人戦とは全く違う試合を見せてくれた。体調的には必ずしも万全とは言ひがたい選手、試合が続く選手と部員数の少ない当部ならではの悩みもあつた。されど、やれることは全てやつてきただ。与えられている環境の中で、強くなる為なら良いということは全てやつた。それを出し切つてくれた。勝負に対する貪欲さ、「勝つのは俺たちだ」という、執念。選手個々が執念を持っていたようを感じた。特に、四年生の鬼気迫る気合は否が応でもチームの雰囲気を勝利の女神へと導いた。個々の勝利への執念が、試合直前では気迫にかわり、流れをよび、相手を圧倒した結果となつた。素晴らしい試合内容であった。

先鋒の海老沼が終始責めに徹し、ポイントを着実に重ね、合せ技一本。続く鈴木（雅）も試合をリードし何とか勝ち点をあげようと積極的な試合展開。残り、一分を切つたところで寝技の攻防となり、押さえ込み14秒効果の優勢勝ち。まさに、執念の塊だった。

次鋒戦を制し2-0で主将の田中に期待がかから。田中の試合前の顔つきは今までに見たことがなかつた。闘争心丸出しの、形相だった。試合内容も、巴投げ、一本背負い、寝技で相手を翻弄し手堅く優勢勝ちをおさめ、次の山本へとつないだ。山本は口には出さなかつたが、体調は万全ではなかつた。ここで勝ち星をあげれば4-0で優勝が決まる大事な場面。長身の相手に得意技の内股を

光った1年生先鋒

海老沼 匡 (商1年)



肩車決まる！ 対 国士館



助監督 園田隆一

今回の優勝にあ

り、まずは大学関係者、明柔会各位、助監督以下スタッフに深く御礼を申し上げます。と同時に、今後とも、ご指導下さいます様、お願いいたします。

Grand! Captaincy



技有りを取りなおも攻める主将田中貴大
田 中(政経4) 対 国士館

何度も繰り出す山本。相手も必死にこらえ、劣勢を挽回せんと責めてくる。

試合中盤、山本が体を上手く回しながらの内股で有効。そのまま、攻防が続きタイム。

優勝が決まつた瞬間である。

この後、赤迫、上川が勝ち点を重ね、6-1で決勝の幕は閉じた。

「魂の柔道」を見させてくれた。

直さなければならぬ点、もつと伸ばさなければならないところは残されているが。「日本一」の響きは最高である。何度も聞いても、準決勝戦での接戦（4-3）を制すことができたのも、勝ちへの拘り、「執念」の一言だと思う。

勝つには勝つ理由がある。練習量、質は最高レベルであることは間違いない。

最後は、日頃の心の充実であると考える。闘争心、平常心どちらも大事である。

他人に頼らず、力を出し切つたことによる勝利であった。

今後は今回の貴重な経験を活かし、更に上を目指し、夏の優勝大会での頂点を極めるべく、指導にあたりたい。四年後のロンドンにもこの選手の中から、センターホールに日の丸が掲げられるよう、我々も全力で道場に立ちたい。

前監督の秀島氏にはゆづくり話をしたいと思つてゐる。「ここまできたよ」と、「本当に有難う」と。

この場をかり、大学関係各位、明柔会各位、助監督以下スタッフに深く御礼を申し上げます。と同時に、今後とも、ご指導下さいます様、お願いいたします。

私の頭の中では、今年に入りメンバー的にも東海大、国士館に引けを取ることなく、優勝できるのでは、ではなく絶対に優勝しなければならないと思っていました。とにかく今年は何が何でもとの思いで臨みました。まずは、六月に行われた優勝大会では、久しぶりに国士館を破り決勝に上がり、もう一角の東海大に挑戦しましたが大将戦の末、敗れてしましました。いろいろな負けた理由はありました。私が強く感じたのは学生達が勝負に対して、勝つことに対する執念が足りないことだと思います。秋に向け練習の中で1つ1つを試合に結びつけ「意味のあることしかやつてない」「勝ちたければきつい時にきつい練習をしよう」と口酸っぱく言い、きつい時に平常心でいれるようにならなければいけない稽古を行いました。その成果がでて体重別団体では準決勝では優勝大会で敗れた東海大に勝ち、決勝では国士館に6-1という大差で勝つことができました。決勝では国士館に6-1という大差になりましたが、勢いではなく実力で勝ち取ったものだと思いました。

四勝一分 汗える寝技



山本宣秀(政経4) 対 国士館



優秀選手に選ばれた上川大樹と
海老沼 匡(共に1年生)

を中心に日頃の練習はもちろん夏合宿を二回行ななどハードな練習をこなし今大会に備えてきました。本当にきつくなかった練習をしてきたからこそ絶対に優勝させてやりたいという気持ちで私自身も学生たちに接してきました。その結果決勝戦では國士館大に大差をつけて勝利することができ、優勝が決まった瞬間は何とも言えない喜びと達成感を得ることができました。

この優勝経験を全部員が今後の柔道人生の糧とするはずです。



鈴木雅典(商4) 対 東海大・国士館



今回の優勝を勝ち取るまで八年という長い道のりでした。コーチを始めた二年が経ち、今年六月の団体優勝大会では決勝で敗れ監督をはじめ全員が悔し涙を流しました。しかしこの敗戦をバネに優勝大会後は、主将の田中

**全日本学生柔道体重別
団体優勝大会を終えて**

コーチ 中濱真吾

このように、学生達に「勝てるんだ」と自信をつけさせることを考え、きちんとやれば勝てる事を理解させることが非常に難しかった。国士館などは、このことを徹底している。それは、ここ数年勝ってきたことによって選手達に理解させ勝つことにより、また、強い高校生を入学させる事につながるといういい循環をしている。それに加えて、付属校の強化である。今の時代、世界を目指せる選手の獲得強化は小学生までいる。小学校を付属中学に入れ、そこから十年特待で強化している。このような強化をしているところを常に勝っていくというのは非常に厳しく常勝明治の頃とは時代が変わってきていたところを知つて頂きたい。今後、常勝明治の復活を目指すならば、大学のさらなるバックアップが必要です。

赤迫佑介千金！の一本勝ち

優勝を体験して

主将 田中貴大



念願の団体戦優勝を果たすことが出来ました。御声援ありがとうございます。



赤迫佑介(法4) 対 東海大

り返って見ると、六月の学生優勝大会では決勝で東海大に敗れ、また個人戦でも優勝者不在という辛い流れでした。部員一人一人がこの悔しさを胸に刻み猛練習を積んで体重別団体戦に臨みました。私自身も夏の個人戦で負け、気落ちした状態がしばらく続きましたが、自分たち四年生には、残された時間があと少しきかに気づき厳しく気持ちを切りかえました。

春、主将に就いた私にとって今年の四年生は良くていいえば個性的、いい方を変えれば我の強い連中が揃っていて、同期のその彼らをまとめ、結束させることが課題でした。私が目標としたのは明るさと厳しさを兼ね備えた部ということで、練習中は喧嘩腰でぶつかり合い、私生活ではみんな兄弟のように接することが出来る部生活にしたいという事でした。その成果とまではいえませんが、六月の優勝大会前のチームワークはおどろく程高まっておりました。部全體が優勝という目的に向かってひとつになっていたと思います。しかし結果は準優勝に終わりました。私は無念の涙が止まら

大器！一年生 上川



上川大樹(経営1) 対 国士館大

なかつた。監督、助監督も涙しておられるのを見て、十一月には絶体勝つぞ！と自身に誓いました。「最後は気持だ！」と園田助監督は我々にいわれる。どれだけ練習しても試合でその結果がだせないといふ意味がない。結果は別にどこから見ても誰が見ても力を出し切ったという試合が出来なければならぬ。それには先ず気持、気魄で相手に絶対負けないこと。私はこの助監督の信念を心に刻んで稽古にはげみ後輩たちにもいい続けてきました。私たち四年にとつては最後の団体戦、それが「学生柔道体重別優勝大会」でした。当然ながら必勝の気持がチームに充ち溢れていた。それがレギュラーひとりひとりに滲透してそれをに力を出し切らせたと信じています。試合は準決勝で東海大にリベンジし、決勝ではその勢いのまま、先鋒から六人連続勝ちという流れで圧勝することができました。そしてまた涙を流してしまいました。

この様な結果を残せたのも監督、助監督、そして先輩方の日頃からの御指導、御声援があつたからこそ、と心から感謝しております。また、四年間一緒にやつてきた同期生と後輩たちに、本当にありがとうございましたと言いたい。後輩諸君にはこの感激をまた味わえるようまた明日から頑張つてもらいたいと願っています。

大外刈決まる!

来年の牽引車 西岡

戦跡をふり返つて

(編集部)

「第10回全日本学生柔道体重別団体優勝大会」は
十一月一・二日の両日尼崎市総合体育館で開催さ
れた。大会には予戦を経た五一チームが参加。

準決勝戦、三連覇を狙う國士館は筑波を下して
決勝進出。一方明治は戦前の予想で國士館と覇を
争うと見られていた東海と対戦した。

國士館との決勝戦、國士館有利の下馬詳は動か
なかつたが、明治は氣力で戦う「明治魂」を遺憾
なく発揮して6-1の大差で圧勝、本大会二度目
の優勝を飾った。

一年生が頑張り四年生が締めた会心の勝利であ
つた。

西岡和志(商3) 対 日体大



決勝戦

明治	大	6	—	1	國士館	大
海老沼	匡	○合	技	羽沢	龍弘	
鈴木	雅典	①(効 果)		能登谷	涉	
田中	貴大	①(技あり)		萩本	貴章	
山本	宣秀	①(有 効)		西潟	健太	
赤迫	佑介	①(技あり)		鈴木	誠	
上川	大樹	○合 技		百瀬	優	
西岡	和志	(技あり)①		白井	勇輝	

左右のカツギ屋

fighter- シゲ!

武田重之(法2) 対 福岡経大

明治は一年生と四年生の団結で決勝に進出、國士館は三、四年生中心の布陣。明治は本大会尻上りに気力を充実させはつらつと戦つてきた。特に全日本J二位の海老沼匡、昨年のインターハイ100キロ超級優勝の上川大樹の一年生コンビは良い戦力となり決勝進出の一翼を担つた。

先鋒戦、海老沼一羽沢は一、二年生の戦い、これを制した方が流れを作れる。開始早々海老沼は足技から肩車に入つて相手を大きく崩したがポイントにはならない。しかしこの先制攻撃は海老沼の先鋒としての覚悟を示した攻撃だった。その後も左大内刈や朽木倒しなどで前に出る。羽沢は巴投から寝技を狙うが不発。三分半ば海老沼出でる相手に合せて回転しながら左内股に入ると「効果」。勢いのついた海老沼、挽回を狙つて出てきた羽沢の背負を返して「技有り」。その後も守りに入らず四分過ぎ追い打の肩車を決めて「技有り」。明治先勝、流れを作つた。

次鋒戦、明治鈴木は左、相手能登谷右、互いに引き手がとれず技が出ない。鈴木は先手を取り巴投、肩車を見せる。能登谷は右体落と攻めるが攻め切れない。終盤、能登谷両膝をついて背負に入れば鈴木後について寝技に入り横四方固めの型になる。能登谷必死にのがれて「効果」に留めた。しかし時間となり明治連勝。二つ取つたことで明治が断然優勢となつた。三将戦では更に主将の田中が奮闘する。田中は腕力が強い萩本を相手に巧さで対抗、右一本背負で「技有り」「効果」をとり、中堅戦山本は左内股で「有効」ついで返し技で「効果」とたたみかけ最後まで攻めの流れで試合で対抗、右一本背負で「技有り」「効果」をとり、



松岡禎基(政経4) 対 福岡経大

影野裕和(政経4 副主将)対 福岡経大

宮田雄大(政経4) 対 埼玉大

明治は先鋒、次鋒で海老沼、鈴木が連勝。この二点があつたからこそ後半の逆転を可能にした。海老沼は払腰を返しての「技有り」、鈴木は大内刈の「効果」だった。

しかし続く田中は「有効」、山本は「指導」、西岡は「技有り」で三連敗、二人残して追う立場となつた。しかし副将上川、大将赤迫の戦いぶりは明治にとってこの大会のハイライトといつてよいだろう。

先ず上川が一点リードで守りの組み手になる相手を、自分の組み手に運び瞬間に放つた出足払の作戦はなかつたに違いない。しかし流れの中で相手の出方を見る余裕があつたのだと思う。

大将戦同点内容リードでも赤迫の念頭に「引分」の序盤、相手は最初から攻め、技数も多かつた。二分すぎ勝ちを意識し焦つたのか飛び込んで内股を仕掛けてきた。赤迫は待つていたかのようにながつた。

大将戦同点内容リードでも赤迫の念頭に「引分」の序盤、相手は最初から攻め、技数も多かつた。二分すぎ勝ちを意識し焦つたのか飛び込んで内股を仕掛けてきた。赤迫は待つていたかのようにながつた。

これをきれいに透し畳に決めた。高校、大学と修羅場を経てきた選手ならではの技だった。

この副将戦、大将戦の勝ち方が決勝戦圧勝につながつた。

明治	大	4	—	3	東海	大
海老沼	匡	(①(技あり))			橋口	靖史
鈴木	雅典	(①(効果))			石川	裕紀
田中	貴大	(有効)	①		吉田	優也
山本	宣秀	(指導1)	①		高橋	達矢
西岡	和志	(技あり)	①		中矢	力
上川	大樹	○出足払			長島	武文
赤迫	佑介	○内股すかし			梅野	啓太

準決勝戦

終了。四対〇この段階で優勝が決まった。山本は夏すぎから腰と足首を痛め十分な稽古が出来ていなかつたのだが大事な場面で「明治魂」を見せてくれたのはさすがであった。

試合の決まつた三将戦、赤迫は東海戦同様淡々と試合を運ぶが、チャンスを見たらたまかけて技を出す。この試合も序盤「指導」をとられたが、その後、左大腰で逆転の「技有り」、明治の流れは止まらない。

副将戦、上川もまた見せる。開始早々の出足払いで「効果」。その後相手に「指導が」与えられれたのが勝因、田中はキヤブテンの意地、山本は腰痛だつたが、四年生最後の試合を気迫で戦つた。と振り返つた。

試合終了後、藤原監督は「決勝は流れを早く作られたのが勝因、田中はキヤブテンの意地、山本は腰痛だつたが、四年生最後の試合を気迫で戦つた」と振り返つた。

明治大学

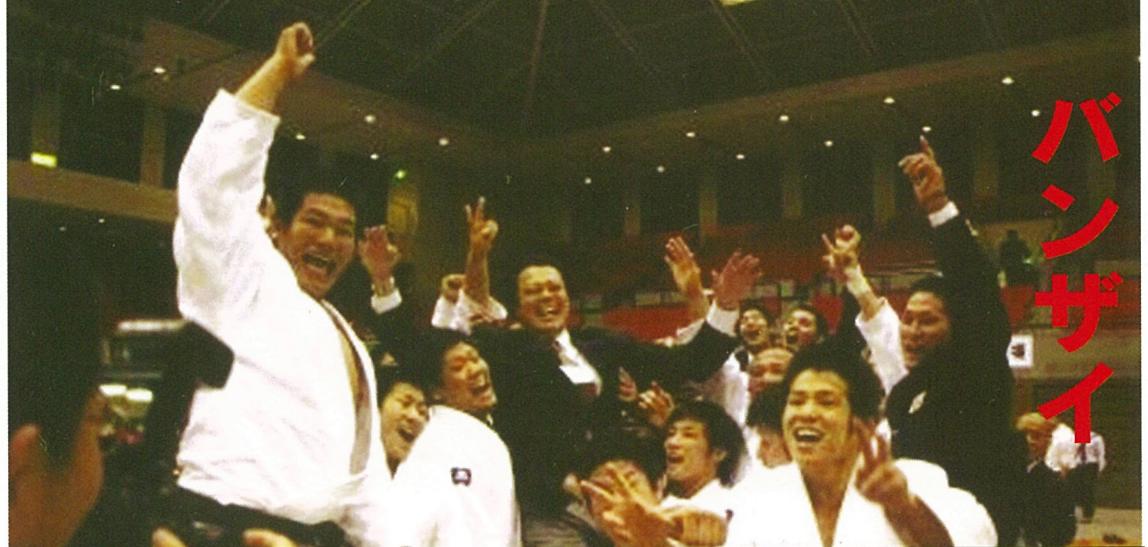
1年が頑張り 4年が有終の美



写真提供
毎日新聞社：近代柔道



やつたぞ！



バンザイ



最
高

明 大

祝勝会

12 / 10

優勝万歳!!

助監督 猿渡琢海



学生全員が一年間厳しい稽古に耐え、妥協しなかった成果が最後に一番良い結果で表れて、本当に良かった。みんな、優勝おめでとう！

また、この優勝の裏には、明柔会及び諸先生・諸先輩方のありがたいバックアップや暖かいご声援があり、我々現場を携わる人間が学生育成だけに集中でき、優勝するための指導をする環境があつたからこそその偉業だと思っております。皆様ありがとうございます。

私共は、昨年国士館に大敗を喫し、今年に向け幾度となく監督以下柔道部スタッフで「優勝させるためには」を課題とし議論してまいりました。そこでいくつかの問題が浮上し、その問題点の一つが「合宿所ばどげんかせんといかん」ということでした。そして監督命にて私が学生と対食をともにする事になり、現在に至つております。また、当時、体育会学生が酔っ払って騒音を出し、周辺住民に迷惑をかけるという事件が紙面を賑やかしており、その影響は非常に大きなものでした。私が合宿所に入った初日は、まさに紙面を賑わせていた事件に近づきつつあります。この悪循環な生活を変えるため、まず朝トレで徹底的にしごき、夜も道場で厳



しく指導しました。そのおかげか夜早く寝る様になり、自然に朝飯も食べ合宿所は次第に静けさを取り戻していました。（夜うるさいため私に引っ叩かれた学生は何人かいましたが……。）今思えば、一年生の体作りには特に良かったのかな？と思

います。

改善の為のもう一つとしてミーティングも数多く行いました。精神論から明大柔道部の歴史に至るまでいろんな講釈をたれましたが、そういうことも今回の優勝に役立ったのかなあ？ と一人で思っている私です。判断は学生に任せます。

なにはともあれ、今回の優勝には学生全員の「優勝したい」という気持ちが試合前から凄く満ち溢れており、我々スタッフにもビシビシ伝わってくるものがありました。練習は濃く非常に集中して行うことができましたし、全てが上手くかみ合つた結果最高の勝利を迎えることができたと思います。そして最高の気分を味わうことができ、その気分を味わわせてくれた弟達よ「ありがとうございます」

今年は夏の優勝大会旗を今一步のところで逃してしまいましたが、一年間あたたかいご声援を下さった皆様本当にありがとうございます。

来年はどこが勝つてもおかしくない戦国学生柔道時代です！

一步一步階段を上がり、チャンスを必ずものにし、今年日本武道館に忘れてきた忘れ物を皆で囲み、「おお明治」と声を高らかに張り上げたいものです。

平成十年度卒 J R A 勤務

凱歌に寄す

—後輩たちに元気を貢つた—

重松 裕之



最近のスポーツ選手のコメントが大いに気になる。

戦い終わつて息も整わない内のインタビューで、「…何も言えないっす!」などの飾らない本音零れるコメントは悪くはない。「そうか、そうか。そりやそうだよな」とTVの前で頷いたりする。

しかしである。試合前の会見などで心境を聞かれて、「見てる皆さんに元気や夢を与えるような試合がしたいです」という類のコメントに接すると、恥ずかしくなるのを通り越して不快になるのは私だけであろうか。私の場合は、ついつい「お前の試合見たくらいで夢なんか持つか!」とTVに向けて突つ込みを入れてしまい、家人にたしなめられる始末である。

だが、しかし。明大柔道部優勝の報に接して、思わず「ウッシャー!!」(藤原監督のニックネームとは係わりありません。念のため)と一人ガツツポーズを決めてしまった私は、学生の頑張りや藤原監督、園田、猿渡両助監督の奮闘は勿論のこと、現四年生と苦労を共にした秀島前監督、そして明大柔道部の伝統維持に情熱を絶やさない明柔会の来し方に思いを馳せながら、じんわりと感激し、そしてフツフツと元気が湧いてくるのであった。

仕事に追われて道場から足が遠のいて久しい。四年生の顔と名前が漸く一致するくらいだ。試合の応援にも行けなかつた。そうした全国の多くのOBに学生達は元気を与えてくれたことは間違いない。

タレント紺いのスポーツ選手の勝つた負けたで夢がどうしたと大騒ぎするほど安

く姿を見るのは先輩として大きな喜びである。

柔道の現場から離れて久しい私が学生の力量を論ずるわけには行かないが、現場の指導陣とOB会(明柔会)の結束力は間違いなくライバル他校を凌駕していると言えよう。

学生らしさこそ大事だ

日本における「柔道」を考えるにおいて「学生柔道」を抜きには語れない。欧州での柔道は「クラブチーム」が中心であり、わが国においても地域に根ざしたスポーツ普及のあり方が論じられて久しいが、教育の一環として振興が図られてきた日本の「柔道」こそ、社会に寄与する人材を育む優れたシステムであると考えるのは私だけではないだろう。教育にあたっては、仲良しクラブ的な妙な平等主義は論外として、火花を散らすような競争のなかにあっても礼節を重んじ、他のスポーツとは一線を隔した矜持を保つことが求められる。勝負の世界であることを理由にルールに抵触しなければ何をやつても良いということでは、文化としての継続ではなく、伝統は築かれない。

「柔道」と「JUDO」の相違について、「一本を取る柔道か、勝つための戦略が全てか」との戦術論ばかりが注目されているようだが、外国選手の優れた技に学ぶべきところは学ぶという姿勢こそが肝要であつて、一部の選手の偏った試合スタイルに惑わされる必要はない。「一本を取る技」の探求と「日本の礼式」の堅持こそが柔道の本質であろう。

学生柔道界を牽引してきた明大柔道部の選手として、高度な技と学生らしい礼節をシッカリと身に着けて貰いたい。明大柔道部の道場は技術研鑽にとどまらない「学生による人生修行」の場所であることを忘れてはならない。学業に悪戦苦闘しながら煩惱を適切処理し、そして柔道修行を全うすることにより、栄冠は更に輝く。

昭和五十七年度卒(元監督、JRA勤務)

くはないが、明大柔道部の後輩達の奮闘は励みになる。
元気を貢つた私は、「よし! オレも頑張るぞ!」と密かに思つた次第である。
(間違つても翌日から朝トレを開始したわけではありません。念のため)

主将コメントから稽古とチームワークが見える

「質より量。非科学的トレーニングをテーマに練習を続けてきた」とは試合後の田中主将の言である。また、試合前に学生だけで円陣を組んで「悔し涙は何度も流してきた。今度は勝つて泣こう」と鼓舞したらしい。その言や良し。この主将コメントを読んだだけチームの雰囲気が伝わってくる。秀島前監督は田中主将のコメントから「将来の主将候補」として力量、人物を高く評価していたが、その主将を中心にして山本君をはじめとする四年生と下級生が切磋琢磨した日頃の稽古が目に浮かぶ。

明大柔道部HPで藤原監督を囲んだ学生達の弾けるような笑顔と田中主将のコメントを読んで、またまた、感激も一入であつたのは私だけではないだろう。新聞報道を読んだ周囲の方々から「おめでとう。圧勝だったね」と声を掛けて貢つた。「いややどうも。学生が頑張つてくれたみたいです」と受け流して、たが、ライバル校との部員数等の違いや明柔会の活動ぶりが話題となるに及び、「やっぱり明大柔道部はすごいね」と言われてしまつては、ついつい、鼻の穴がグワッと広がつて胸をググッと張つてしまうのであつた。

未だ人間修行が足りない私の話はさて置き、こうした誇れるチームを作り上げた監督以下の指導陣に心から敬意と感謝を表したい。私が監督を退任する折に「集団指導体制が必要な時代」との提言をさせて頂いたが、現指導陣はまさしく合理的な連携の下でその指導力を如何なく発揮している。

藤原監督は、新日鉄の幹部社員として、また、柔道界での活動を通じて培つた広い視野に裏打ちされた良識をもつて学生を指導するとともに、その飾らない人柄でスカウトや学校当局等との渉外折衝に成果を得ている。園田助監督は、警視庁勤務と全日本コーチとの三足のワラジを履きながら、厳しい稽古を学生に課す役割を担うことにより監督を補佐し、一方の助監督である猿渡君はJRA勤務の傍ら、道場での指導にとどまらず、合宿所で学生と寝食を共にしてトレーニングや生活指導に取り組んでいる。また、京葉ガスの仲濱君をはじめとしたコーチや現役OBの協力も大きい。若い助監督やコーチ達が学生を指導することによって自身も成長して行き

胸、躍らせた鮮やかな技と勝負への執念

竹園隆浩



十一月一、二日、兵庫県の尼崎市記念公園

総合体育館で行われた第10回記念全日本学生体重別団体優勝大会で、明大が八年ぶり二度目の栄冠をつかんだ。随所に出た鮮やかな技と勝負への執念に、OBとして会場で胸躍らせた。

決勝は胸のすくような快勝。相手はここ数年、学生柔道界に君臨する国士大。六月の全日本学生優勝大会の準決勝でも勝利はしたとは言え、三連覇を狙つた強豪を六人連続勝利で打ち破つた。

先鋒66キロ級で一年生の海老沼匡が栄光への口火を切つた。すくい投げと肩車の技あり2本。同じ東京・世田谷学園高から明大を経て警視庁に入つた兄の聖は73キロ級学生王者だつたが、気の強さは兄を上回るかも知れない。一本勝ちにも静かに礼をしただけだった。

そして、明大らしさを見せたのが次鋒60キロ級の鈴木雅典だ。相手は同じ四年生の能登谷渉。意地と意地のぶつかり合いから終了間際に相手の背負い投げをつぶして横四方固めへ。必死で逃れる相手に一本は奪えなかつたが、効果。リードは2点に広がつた。

翌日、国士大の山内直人監督が話した。「あの次鋒戦が痛かつた。1点なら、まだ追いかげられる。でも、2点先に取られると、3点取らないと勝てない。しかも引き分け寸前。がつくりした」

まさに真理だ。一本はある程度仕方ない。だが、競つたところでの白、黒が全体の勝敗に大きく響く。最近は逆の展開で国士大に遅れを取ることが多かつた。北海道・旭川竜谷高出身で、「誰にも負けない練習をしてきた」という鈴木が文字通りの「執念」で作つた流れに乗り、後は溜まつて鬱憤を一気に晴らしてくれる勝

利が続いた。

歴史の浅い体重別団体が、57回を数える伝統の優勝大会と同様に盛り上がるか。当初は不安の声もあった。だが、今はもう両大会は遜色ない。今年、2大会とも決勝に進んだのは明大だけ。機は熟していた。

配列も味方した。以前は抽選は1度。だが、今大会は試合日ごとに配列を変えた。最終日は66、60、90、100、73、100超、81キロ級の順。軽い階級でリズムを作り、主将田中貴大（鳥栖＝90キロ級）、エース山本宜秀（世田谷学園＝100キロ級）の四年生で中盤を締め、終盤に上川大樹（一年、宗徳＝100キロ超級）を入れる。勝利の女神も後押ししてくれているような理想的な抽選結果となつた。

眞のハイライトは準決勝の東海大戦だった、と思う。六月の決勝は1-3で敗れた相手に海老沼、鈴木が優勢勝ち。順調に滑り出した。だが、ここから三人が連続で優勢負け。逆転でリズムを奪われた。こちらの微妙な技はポイントにならず、反則を取られて敗れる嫌な展開。正直、苦しかった。

ここで海老沼とともに優秀選手に選ばれた副将の100キロ超級・上川が登場した。昨年の高校総体重量級王者はわずか47秒で出足払い一本。3-3ながらボイントで再逆転した。東海大はこの階級は全日本選手権出場の石井竜太がいて彼と上川の対戦と思われた。ところが、二人は上川の2戦2勝。学生個人体重別では内まで放り投げている。そこで相手は四年生の梅野武文を起用してきたが、大物新入生は全く問題にしなかった。

そして、この試合の主役、大将の81キロ級に起用された四年生の赤迫佑介が畠に上がった。本来は73キロ級。だが、その勝負強さを買われ、一つ上の階級で命運を託された。追いかける東海大・長島啓太は奥襟を持ち、内またなどで攻勢に出る。小差でも勝てば再々逆転だ。だが、赤迫はじっくりと勝負所を待っていた。2分8秒。仕掛けた長島の技を計ったように透かす。相手の体が宙を舞つた。内またすかし。大歓声が巻き起つた。

普段は寮長を務める赤迫は、世田谷学園高出身。高校時代から大きな相手と戦うコツと勝負カンを身につけていた。何より、臆しない心意気がいい。三代目の師範、三船久蔵十段も得意だった相手の力を利用して技を透かし、返す妙技は明大の伝統の一つだ。追いつめられた緊張感の中で出す切れのいい技こそ、神田駿河台の道場で鍛えた底力だろう。

優勝が決まった後、準決勝で国士大に敗れて3位だった日大的金野潤監督が声を

とも関西在住の明柔会員に出会うことがなかつた。第一日目明治大は二回戦から出場、福岡経済大に一本勝ち四、優勢勝ち一、六対〇で勝ち上がつた。第二日目、早々に昼食を済ませて二階一般席に陣取る。右隣席では、陽気な中年夫婦が持参の手作り弁当を逞しく平らげていた。午前十一時試合開始、三回戦埼玉大に五対二、四回戦日体大には三対一で勝ち進んだ。二試合を通して感じたこと。明治大各選手はキッチリ引き手を取つて積極的に技を出す、堂々の試合運びである。泰然として試合の進行を見守る監督、助監督の姿も頗もしい。日常の指導陣と部員諸君との“志”を同じくする為の意志疎通の徹底と、目標を達成する為の“練度”的高さと確かさを垣間見る思いがした。準決勝東海大戦は大会“屈指”的好試合だつた。明治大が先鋒次鋒で二点先取、東海大が五将から三将まで三点取つて逆転、一瞬嫌な予感が脳裏を走つたが、ここで副将上川選手が見事出足払いの一本勝ちで、三対三ながら内容で逆転した。大将戦は明治大引分け逃げ切り作戦かと思ひきや、さにあらず、兩者見事な技の応酬の中、赤迫選手見事な内股透かし一本勝ちで四対三、堂々の勝利となつた。好試合大接戦に小生、久し振りにエキサイトした。ふと我に返ると、隣席の「手作り弁当夫婦」が、一人応援の雄叫びをあげる初老の男を、呆れた顔の眼差しで、見つめていたのにはマイッタ。決勝戦は三重県から息子と来春明治大進学希望の高校生一人を連れた河田OB（昭和五十四年卒）と一緒にた。三連覇を目指す國士館大とは正直なところ、接戦を期待（？）しながらの観戦であったが、六対一の大差勝利で終わつた。選手諸君には失礼ながら、喜びよりも驚きが先で、”山”が動くとはこの事かとの思いがしたものだ。この勝利を体験した部員諸君には、珠玉のような思い出となるであろう。改めて明治大柔道部百年の歴史に輝かしい一齣を加えた偉業を心より称えたい。と同時に、日本柔道アーテネから北京への落差の軌跡を他山の石として、新しい歴史を実現するべく、更なる精進努力を期待してやみません。

（昭和三十七年度）

大阪、茨木市在

かけてくれた。

「おめでとうございます。うちも明治と戦いたかつた。古いOBたちは、他の大学に勝ったと言つても余り喜ばないが、優勝出来なくとも『明治に勝つた』と言うと褒めてくれる。それだけいつも目標にしています」

近年の学生大会は、大勢の部員の集団応援で時には審判を批判したり、相手の選手を小馬鹿にするような声援も飛ぶ。そんな中で部旗も部歌もなく、少数精銳で戦う後輩たちに期待してくれる他大学関係者の存在に、柔道界を支えてきた母校の使命の重さを感じた。

上級生から一年生までが一丸となり、ヒーローが試合ごとに変わつた。きちんと両手で持って立ち技、寝技にこだわらず攻める。尼崎での戦いは、一つの型にはめない明大の持ち味が遺憾なく發揮された結果だと思う。個性を大事に、共通の理念はは抜けいこに裏付けされた勝負への執念だけだ。

過去の黄金期とは違う、新時代を予感させる優勝。その夜、東京から応援に駆けつけてくれた学生たちと酌み交わした酒は、格段に美味かった。

昭和六十年度卒（朝日新聞記者）

観戦記

努力を称えて

栗原英道

八年振り、二回目の優勝、心よりおよろこび申し上げます。以下拙文ですが大会観戦記をお届けします。

関西地区での学生柔道唯一の全国大会は、第十回記念大会と銘打つて十一月一日、二日、尼崎市で開催された。毎年楽しみにして出掛けるが、近年は関西勢の不振の為か、今一つ盛り上がりがない。それに残念ながら両日

は全く問題にしなかつた。

感動をありがとう

河田恵吾

今まで、こんなに大差の決勝戦をみたことがあるでしょうか。これこそ、藤原監督の言う「魂の柔道」そのものじゃないでしょうか。

今、この原稿を近代柔道12月号の明治優勝特集号を見ながら、書いています。みんな最高の笑顔だよ。

今回、久し振りの優勝の瞬間に立ち会えて、本当に感激でした。選手達、藤原監督、本当にありがとうございました。今回、私は、来年度明治入学希望者の菱田君（皇學館高校三年）と、次男（中二）を連れて、見に行きました。もちろん、子供達の感激もすごかつたのですが、何より私が嬉しくて、勝利が決まつた後、みんなの胴上げの写真等を撮りまくったデジカメを無くしてしまったくらいの感激でした。

今年は、明治が優勝しそうだと評判が高く、この六月の無差別の団体戦も東京まで見に行きました。夏の大会は、準決勝で国士館を破り、決勝の東海戦は大将戦での残り1分くらいでの逆転負けを食らいました。本当に、勝負の難しさ、怖さを実感した試合でした。今回も、明治は、決勝までの戦いを見ると、決して調子は良くなかつたのです。特に、四年のポイントゲッターである山本が、腰の怪我から、絶不調で、格下の相手に負けたりしながら、決勝戦を迎えたのでした。ところが、決勝では、誰もが予想しなかつた六人連続勝ちの6-1での快勝でした。こんな結果をだれかが予想したでしょうか。菱田君は、優勝の瞬間を目の前にして、「こんなにすごい大学に自分が行けるのだろうか」と、感激そのものでした。そして、「自分も入学できたら、絶対に頑張る」と決意を新たにしてくれました。中二の次男も、ただただ「すごい、すごすぎる」との一言でした。

実は、私はこの準決勝での東海戦、3-3の内容勝ちで迎えた大将戦、前回の残り1分での逆転負けのシーンが頭に甦り、本当に見ていたのです。ところ

新主将に 西岡 和志

2009 年度幹部部員紹介



副主将
田村 貴成
新潟県出身
世田ヶ谷学園高校



副主将
清水 龍太 (政経)
青森県出身
青森山田高校



主将
西岡 和志 (経営)
広島県出身
崇徳高校



審長
松岡 裕太郎 (政経)
埼玉県出身
武藏越生高校



主務 (会計担当)
三好 康督 (文)
宮崎県出身



主務
佐藤 拓人 (政経)
宮城県出身
東北高校



徳山健二郎

明治にとって本年度最後の団体戦である今大会で、八年ぶり二度目の優勝を果たした。準決勝では今年六月の団体戦で本学を倒し優勝を果たした東海大と当たり、接戦の末、4-3で辛勝しリベンジに成功した。優勝候補筆頭校を倒し、勢いに乗った本学は決勝戦で国士大に6-1と圧倒。一年間部を引っ張つた田中主将は「自分たちが入学してから一度も団体戦優勝を果たせず、何度も悔し涙をし

た。学生最後の大会で優勝できて本当に嬉しい」と、目に涙を浮かべて言った。
初戦から準々決勝まで順調に勝ち進み準決勝の東海大戦へ。先鋒の海老沼、次鋒の鈴木の軽量級選手が勝利し、決勝の舞台が見えてきた。しかし、五将から三将に楽しい一日でした。部員数33名の学校が、体育学部があり部員数100名を越す学年で帰るとのことで、みんなでの校歌、優勝の歌が、なかったのが、残念でしたが、明治は、他の大学ほど、学校からの支援はない、その分、OB会がしっかりとっています。そして、入試も卒業も難しい。でも、それが良いのだと、その難しさが頗るくはこの体制が永遠に続き、連覇を祈念して、「おーおー、明治」の卒業生と言つていいのではないか。
頗るくはこの体制が永遠に続き、連覇を祈念して、「おーおー、明治」の卒業生であることを誇りに思い、ペンをおきます。

明大スポーツから

五十四年度卒
三重県、松阪市在

明治にとつて本年度最後の団体戦である今大会で、八年ぶり二度目の優勝を果たした。準決勝では今年六月の団体戦で本学を倒し優勝を果たした東海大と当たり、接戦の末、4-3で辛勝しリベンジに成功した。優勝候補筆頭校を倒し、勢いに乗った本学は決勝戦で国士大に6-1と圧倒。一年間部を引っ張つた田中主将は「自分たちが入学してから一度も団体戦優勝を果たせず、何度も悔し涙をし

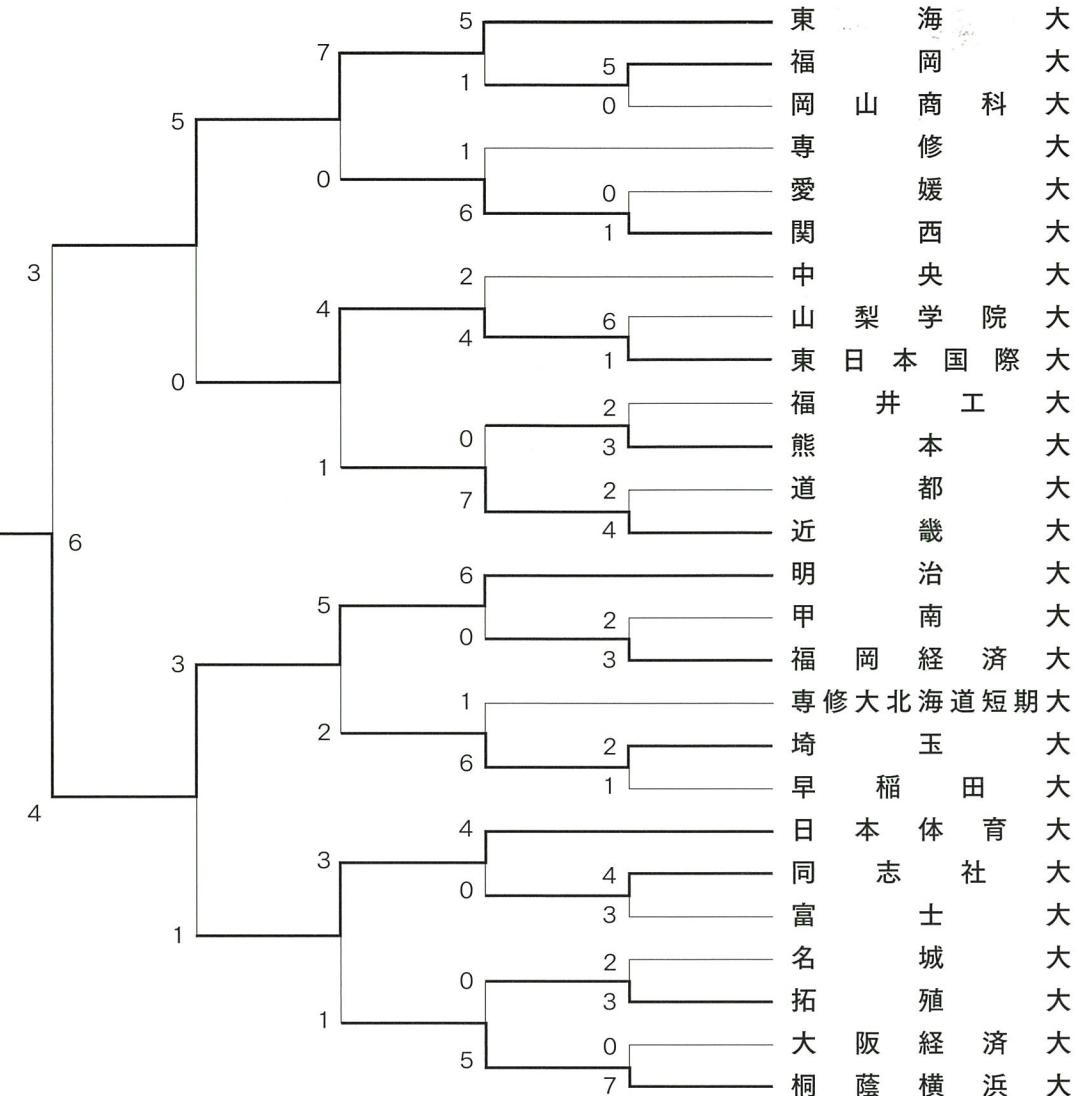
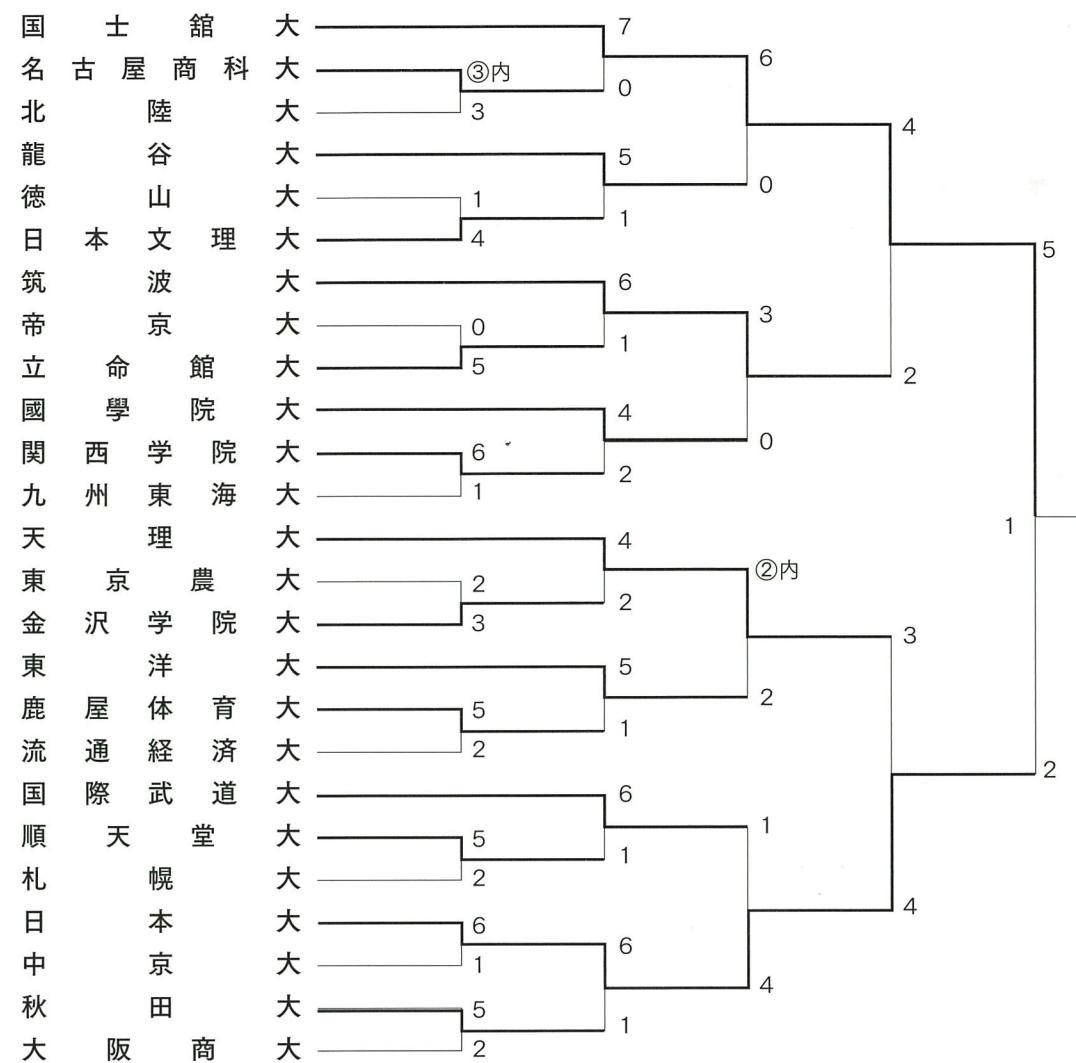
た。学生最後の大会で優勝できて本当に嬉しい」と、目に涙を浮かべて言った。
初戦から準々決勝まで順調に勝ち進み準決勝の東海大戦へ。先鋒の海老沼、次鋒の鈴木の軽量級選手が勝利し、決勝の舞台が見えてきた。しかし、五将から三将にかけて一進一退の攻防を制すことができず、立て続けに三連敗を喫する。副将は先月の個人戦インカレの100キロ超級準優勝者の上川。「三回戦では一本負けをしたが、それを機に気合いが入った」(上川)と得意の出足払い一本勝ちをする3盤に「効果」を一つ取られ、不利な状況が続いたが、相手選手の内股をうまく透かして一本勝ち。チームの危機を救った。

決勝戦の相手は今大会二連覇を果たしている強豪校・國士大。苦戦を強いられる予想されたが、試合の流れは明治が握っていた。準決勝と同じく、先鋒と次鋒で出場の軽量級の二人が、快勝しチームに勢いをつける。「後ろに強い先輩たちがいるので、自分は思いつきり柔道を楽しもうと思つてやつた。結果良い方向に出た」(先鋒・海老沼)。その後、五将の田中主将が氣迫のこもった柔道を見せ、粘り勝ち。続いて、本学のエースである中堅の山本がきっちりと自分の仕事をし、優勝が決まる。その瞬間、明治側のベンチは大声をあげ、全身で喜びを表現した。

「選手が本当に良く頑張ってくれた。相手校のメンバーの読みはうまく当たつたし、最終日の戦う配列も明治にとつて都合が良かった。四年生が頑張り、一年生の上川、海老沼がリズムを作ったのが勝因」(藤原監督)。

監督、飯田部長、園田助監督、田中主将と次々と宙に舞つた。「四年間の最後となる一番重要な舞台で、一番良い結果を出せて嬉しい」(田中主将)と今までの努力が実を結び、有終の美を飾れた。

明スポーツ記者



準決勝

大副 三甲 三乙 次先 明治大
鈴木 影野 田中 赤迫 宮田 武田 松岡 茂之 貞基
雅典 裕和 貴大 佑介

○大内判
○(優勢)
○腕固股

福岡経済大 永田 雅一
阿部 竜太
江口 太造
大山 徹
松本 恭明
延時 晓寿
城野 健一

二回戦

次 先
鈴木 雅典
海老沼 匠
田中 貴大
山本 宜秀
西岡 和志
上川 大樹
武田 茂之

○横四方固
○合
○肩
○固
○技

吉田 岡村 江口 中島 石本 佐藤 永山
雅晴 照久 遼至 裕樹 匡史 秀晶 順一

三回勝

次 先
海老沼 明治
鈴木 雅典
田中 貴大
山本 雅典
西岡 大介
上川 佑介
赤迫 介

○合
○優
○勢
○刃
○外
○大
○支
○釣
○足
×
×
×

日本体育大
青木 勇介
笠井 貢太
亀田 智
志村 大介
河野 雅司
赤尾 雄司
小林 雄
大介 優太
貢太 雅司

四
回
戰

羽沢
龍弘
能登谷
涉
萩本
貴章
西潟
健太
白井
勇輝
百瀬
優
池田
正文

○肩
内
股 固
小内巻込(大内刈)
○(有効)
○(指導1)
○(技あり)

種市 彩人
吉田 堯大
沼田 貴廣
バトルガーデン
久保 宗平
佐藤 大輔
小林 大輔
大地

2008 成績一覧

-90kg級 影野 裕和 (4年生) 優勝
○影野-穴井 亮平 東海大学(ゴールデン)

-90kg級 田中 貴大 (4年生) 3位

-100kg級 山本 宜秀 (4年生) 優勝
○山本-増田 龍二 日本大学(優勢)

-100kg級 清水 龍太 (3年生) 3位

+100kg級 上川 大樹 (1年生) 2位
上川-須藤 紘司○ 国士館大学(袖釣り)

全日本ジュニア柔道体重別選手権大会(9月14日)

-66kg級 海老沼 匠 (1年生) 2位
海老沼-前野 将吾○ 東海大学(優勢)

-81kg級 吉井 健 (1年生) 3位

+100kg級 上川 大樹 (1年生) 2位
上川-百瀬 優○ 国士館大学(ゴールデン)

世界ジュニア柔道選手権大会(10月16日~19日)

-66kg級 海老沼 匠 (1年生) 3位

全日本学生柔道体重別選手権大会(10月11日・12日)

-60kg級 鈴木 雅典 (4年生) 3回戦敗退

-66kg級 下山 典大 (1年生) ベスト8

-73kg級 赤迫 佑介 (4年生) 3回戦敗退
西岡 和志 (3年生) ベスト8

-81kg級 松岡 趟志 (4年生) 2回戦敗退
武田 茂之 (2年生) ベスト4
鈴木 敏和 (2年生) 3回戦敗退

吉井 健 (1年生) 3回戦敗退

-90kg級 影野 裕和 (4年生) ベスト4
田中 貴大 (4年生) 1回戦敗退
松岡裕太郎 (3年生) ベスト8

-100kg級 山本 宜秀 (4年生) 3回戦敗退
林田 洸己 (4年生) 2回戦敗退
清水 龍太 (3年生) 1回戦敗退
木下 泰成 (2年生) 3回戦敗退

+100kg級 松岡 稔基 (4年生) 3回戦敗退
田村 貴成 (3年生) ベスト8
上川 大樹 (1年生) 2位

全日本学生柔道体重別団体優勝大会(11月1日・2日)
優勝
明治大学メンバー

-60kg級 ①鈴木雅典 (4年生) ②三枝智哉 (1年生)

-66kg級 ①宮田雄大 (4年生) ②海老沼匡 (1年生)

-73kg級 ①赤迫佑介 (4年生) ②西岡和志 (3年生)

-81kg級 ①武田茂之 (2年生) ②吉井健 (1年生)

-90kg級 ①田中貴大 (4年生) ②影野裕和 (4年生)

-100kg級 ①山本宜秀 (4年生) ②清水龍太 (3年生)

+100kg級 ①松岡稟基 (4年生) ②上川大樹 (1年生)

講道館杯全日本柔道体重別選手権大会(11月16日)

-60kg級 鈴木 雅典 (4年生) 2位
鈴木 雅典-秋元 希星 (筑波)○

-73kg級 海老沼 聖 (警視庁) 3位
3位決定戦 ○海老沼 聖-赤迫 佑介(明治大学)

-81kg級 河原 正太 (京葉ガス) 3位
3位決定戦 ○河原 正太-武藤 力也(了徳寺学園)

-90kg級 矢寄 雄大 (了徳寺学園) 3位
3位決定戦 ○矢寄 雄大-山本 宜秀(明治大学)

第8回青島国際大会(11月29日~30日)

-66kg級 海老沼 匠 (1年生)

嘉納治五郎杯 出場選手名
学生

-60kg級 鈴木 雅典 (4年生)

-66kg級 海老沼 匠 (1年生)

+100kg級 上川 大樹 (1年生)

OB

-81kg級 河原 正太 (京葉ガス)

+100kg級 棟田 康幸 (警視庁)

東京学生柔道優勝大会(5月25日)
3位

全日本学生柔道優勝大会(6月28日・29日)
2位
明治大学メンバー

①田中貴大 (4年生) ⑦西岡和志 (3年生)
②影野裕和 (4年生) ⑧清水龍太 (3年生)
③松岡稟基 (4年生) ⑨田村貴成 (3年生)
④赤迫佑介 (4年生) ⑩石沢翔太 (2年生)
⑤林田洸己 (4年生) ⑪木下泰成 (2年生)
⑥山本宜秀 (4年生) ⑫上川大樹 (1年生)

1回戦 ①-1
明治大学-桐蔭横浜大学

田中 貴大-英 剛太郎○ (優勢)
西岡 和志-藤本 正寛 (引き分け)

○山本 宜秀-坂本 正吏 (送り襟絞め)

田村 貴成-森田 晃弘 (引き分け)
影野 裕和-出羽 拓馬 (引き分け)
清水 龍太-又吉 祥元 (引き分け)
松岡 稟基-佐々木 良太 (引き分け)

2回戦 7-0
明治大学-福岡経済大学

○赤迫 佑介-大山 徹 (優勢)
○上川 大樹-新宅 一成 (合わせ技)
○山本 宜秀-鈴木 健太 (内股)
○田中 貴大-江口 太造 (背負い投げ)
○影野 裕和-松本 恭明 (横四方固)
○清水 龍太-永田 雅一 (合わせ技)
○松岡 稟基-平田 英人 (合わせ技)

3回戦 ②-2
明治大学-天理大学

西岡 和志-斎藤 涼○ (優勢)
清水 龍太-原田 浩平 (引き分け)
○上川 大樹-生駒 知也 (横四方固め)
○山本 宜秀-中島 大勝 (優勢)
田中 貴大-近間 陽介 (引き分け)
松岡 稟基-川野 達也 (引き分け)
影野 裕和-松宮 広○ (優勢)

4回戦 5-0
明治大学-日本体育大学

西岡 和志-高田 克也 (引き分け)
田中 貴大-村上 祐二 (引き分け)
○山本 宜秀-赤尾 正吾 (内股)
○上川 大樹-延城 啓和 (横四方固め)
○影野 裕和-中水 大貴 (優勢)
○清水 龍太-月波 貴広 (上四方固め)
○松岡 稟基-河添 佑 (合わせ技)

準決勝 ③-3
明治大学-国士館大学

影野 裕和-寺島 光済 (引き分け)
清水 龍太-百瀬 優○ (優勢)
○田中 貴大-萩本 貴章 (一本背負い)
○山本 宜秀-寺島 克興 (優勢)
上川 大樹-須藤 紘司○ (優勢)
○西岡 大樹-白井 勇輝 (優勢)
松岡 稟基-西潟 健太○ (優勢)

決勝 1-3
明治大学-東海大学

西岡 和志-小出 満○ (優勢)
○山本 宜秀-北見 剛 (内股)
清水 龍太-片渕 一真 (引き分け)
上川 大樹-梅野 武文 (引き分け)
影野 裕和-吉田 優也○ (優勢)
田中 貴大-高橋 達矢 (引き分け)
松岡 稟基-石井 竜太○ (小外掛け)

アジア・ジュニア・ユース選手権(7月8日~10日)

-66kg級 海老沼 匠 (1年生) 3位
フランスジュニア国際大会

-66kg級 海老沼 匠 (1年生) 優勝
ロシア・ジュニア国際大会

+100kg級 上川 大樹 (1年生) 3位
東京学生柔道体重別選手権大会(9月7日)

-66kg級 海老沼 匠 (1年生) 2位
決勝 海老沼-能登谷 渉○ 国士館大学(ゴールデン)

-73kg級 赤迫 佑介 (4年生) 優勝
決勝 ○赤迫-河野 雄司 日本体育大学(判定)

山口友孝氏メキシコ合州国スポーツ殿堂入り

山口友孝（S三五年度）がメキシコ柔道の発展に尽くした功績により
一〇〇七年十一月スポーツ殿堂入りを果たした。

メキシコ柔道協会

一一月七日メキシコ体育協会でスポーツの殿堂入りの儀式とトロフィー Luchador Olmeca（オルメカの戦士）二〇〇七の授与式が行われた。

メキシコ柔道協会が推举した山口友孝先生とバネッサ・ザムボット選手のこの儀式での表彰は表彰委員会は満場一致で承認した。
山口先生は我々の国（メキシコ）に来た一人の優秀な外国人コーチでナショナル・チームのコーチとして国際試合で大きな成果を獲得した。それにつき彼の行った仕事（柔道指導）はメキシコ柔道の大きな財産となり、メキシコ柔道協会は感謝を込めて十年以上前から国内で最も重要な試合に彼の（山口先生）名前を付けた。

一九九四から国内で最も重要な柔道大会が「毎年二月開催」

☆ Torneo Profesor Tomoyoshi Yamaguchi 山口友孝先生杯と命名される。

☆ 一〇〇七年一二月七日メキシコ国スポーツ殿堂入りする。

メキシコで指導に当たった全ての外国人スポーツ・コーチの中で、柔道の普及・技術の向上、また国際試合での試合成績を評価され、メキシコ柔道協会の推挙で殿堂入りする。

山口友孝

昭和三五年度商学部卒

静岡県沼津市出身

三九年講道館派遣でメキシコへ

六二年帰国



山口夫妻

現在 故郷伊豆でメキシコ料理レストランを経営

藤原監督、学生諸君！ 優勝 おめでとう！
大学柔道日本一になったことを大変誇りに思っています。
三七年に卒業した六八才のぼくらオジさん達は、六月六日に同期会をやりました。皆さんもご承知のように、山口先輩が伊豆半島の土肥町でペンションを経営されています。
今日は先輩の弟子が経営する旅館を紹介してもらい、一泊二日のあわただしい日程ながら全国から十二名が集結しました。
来年には、神永正夫さん（九州明柔会長・六九才）の同期が集まるそうです。
この土肥町は柔道が大変盛んです。そして先輩のおかげで明柔の皆さんをいつも大歓迎してくれます。
古くは小林敏邦さん（明柔編集長・七二才）の同期会とか、金城孝治さん（藍綬褒章・七〇才）の同期会や、細川隆夫さん（奨学金委員長・六七才）の同期会が行われました。

来年には、神永正夫さん（九州明柔会長・六九才）の同期が集まるそうです。
学生諸君のガンバリで、今年はよい年になりました。ありがとうございました！！



37年度の同期会（伊豆土肥柔道クラブの皆さんと）

事務局より

局長 山内鉄生



編集後記

編集後記

取るなら取つて見よ優勝旗

渡しやせぬ

桜の木陰で鍛えたるコチヤ

明大の柔道にや、骨がある！

コチヤエ、コチヤエ、

やるならやつて見よ渡しやせぬ

優勝旗

涙を流して鍛えたるコチヤ

明大の柔道部にや骨がある！

コチヤエ、コチヤエ、

やるならやつて見よ渡しやせぬ

以上今号の編集後記は「明治大学柔道部優勝の歌」をもつてかえさせて頂きます。

良いお年をお迎え下さい。

訃報

平成一〇年 事務局把握物故者

利 宗一氏 三月一七日 S四六年度卒

塩見 泰之氏 三月三一日 S三〇年度卒

徳山 操氏 三月九日 S三三年度卒

六郷 治庸氏 五月九日 S三五年度卒

ty444@oak.ocn.ne.jp 明柔会と明記し氏名・卒年を添えて下さい。
試合当日に経過配信・結果配信・トピックス（〇〇氏が＊＊ポストに就任）

訃報

平成一〇年 事務局把握物故者

利 宗一氏 三月一七日 S四六年度卒

塩見 泰之氏 三月三一日 S三〇年度卒

徳山 操氏 三月九日 S三三年度卒

六郷 治庸氏 五月九日 S三五年度卒

(K)

(三七年卒) 杉原 構

「同期の集いをやりました」